

『リルケ雑記』

大山定一氏の『リルケ雑記』は私の心をひらいてくれること多大であった。この書をよんで以来、つぎのような文章が私の心を大きく占有している。

「僕は詩を書いた。しかし年少にして詩を書くほど、およそ無意味なことはない。詩はいつまでも根氣よく待たねばならぬのだ。人は一生かかって、しかも出来れば七十年或は八十年かかって、蜂のやうに人生の密と意味をあつめねばならぬ。さうして、やっと最後に、わづか十行の立派な詩がかかるだけだらう。詩は人々が考へるやうに感情ではない。詩がもし単なる感情だったら、すでに年少にしてあり余るほど持つてゐなければならぬ。しかし詩は、ほんたうは経験なのだ。一行の詩のために、僕らはあまたの都市、あまたの人々、あまたの書物を知らねばならぬ。あまたの禽獸をみななければならぬ。空とぶ鳥のつばさを感じなければならぬし、朝ひらくちひさな花の深い羞らいを究めねばならぬ。……詩人はあらゆるものを想ひ出に持たねばならぬのだ。

臨終の人々の枕べにすわってゐなければならぬし、あけはなした窓が夜かぜにカタコトとなる部屋でさびしいお通夜もしなければならぬ。しかも、ただ追憶を持つだけなら、何のたしにもならぬ。追憶が一ぱいになると、つぎにはそれを忘却することが出来ねばならぬだらう。そしてしづかに、ふたたび想ひ出がかへってくるのを待つ大きな忍耐があるのだ。追憶だけでは何のやくにも立たぬ。追憶が僕らの血になり、眼になり、表情になり、名まへのわからぬものになり、もはや僕ら自身とすこしも区別することが出来ぬものになって、初めて、ふとした偶然に、一篇の詩の最初の言葉がこれら想ひ出のまんなかに、想ひ出のかけからぼっかり生れるのだ。」

これは詩における「抽象の悲しみ」ということをいったあとに引かれた、リルケの『マルテの手記』の一節であるが、私はこれを読みながら、伊東静雄氏が「詩は感情ではないことが、はっきりわかった」といったり、「全体験を傾注して観る、それが詩である」といった言葉をすぐ想い起こした。

ここしばらくは、先達のこれらの言葉に、私の文学に関する思考は支配されてゆくだろうと思っている。

(昭和二十三年八月)